

# 山と博物館

第31巻 第12号 1986年12月25日

大町山岳博物館



森城跡 (写真中央付近)

## 森城跡の展望台

中世豪族の居館や山城の跡を、高い所から鳥瞰できればどんなにかいいだろうな、時々と思う。しかし山城はヘリコプターか何かで上空に舞い上がるより仕方がなく、そんな機会はまあありそうにもないが、居館跡の方ならそれとペアになっている山城の一角に、そこを大観するに良い場所を見つけれられる場合がよくあるものである。森城跡でも西方山上のサテライト局(このあたりに城の物見があった)へ登る道の途中、湖に向かって突出した尾根の肩のあたりに恰好な処がある。

城は木崎湖(昔は森の池とか海の口の池とか言ったらしい)の南西部から北に向かって延びる半島の上に設けられており、その先端部分の小高い丘の上、写真左よりの木立のこんもりしたあたりにその中心部分があり、ずっと南方の、現在の平公民館や海洋センターの北の所に外堀やら木戸があった。その間を東西に掘り割って何本かの堀を設け、城の奥に向かって進む道は、堀にかけた橋を渡るたびに、鍵の手に折れ曲っていかねばならない。これらの堀には、東方の山麓を流れ出る農具川をせき止めて、湖の水位を上げることによって水が入り、西側の湖と水面がつながることになる。城の西方、写真では手前の水田地帯はいまも湿田だが、往時は湖の一部分であり、三方湖にかこまれた森城はまさに堅固な水城といえよう、ここへの築城はすばらしい着想といえよう。

この城を詰の城として長い間使用していた仁科氏が滅亡した後、松本の小笠原氏は北方への備えとして引き続き堅持していたことが、天正一二年(一五八四)の小笠原貞慶の左の文書で知られる。

(前略)森之要害之義、河・伊之領候条、普請以下為横目二木九左エ門、同六右衛門指遣候略)

しかしそれから二二年後の元和元年、江戸幕府の発した一國一城令によってこの城も破却され、數百年間の歴史を閉じることになる。

(篠崎健一郎)

# 仁科氏の城跡

篠崎健一郎

はじめに

仁科氏の城跡というと、大町の人ならほとんど、ああ、木崎湖のほとりにある森城跡のことだなどお思いになるだろうし、その中でも郷土の歴史に興味があり、それに関係する本などを読んだ方なら、森城は仁科氏の合戦用の城であり、政務をとったり、日常生活用の館は、市内の天正寺のところにあった、と御承知であるだろう。さらに大町市内ばかりでなく郡内外を問わず、どこかの町や村にもたいてい「城」「城山」「城方峯」などとよばれる、ちよつと際立った地形の山があり、城によつてはそこにさまざまな伝承のまつわるものもある、ということを知っている方もあ



天正寺館の北堀

ると思う。

それぞれみな本当で、実際郡内だけでも規模の大小、時代の差異はあるものの、数十ヶ所の山城跡、居館跡があり、直接間接のちがいはあつても、そのほとんどはおそらく平安時代後期から、戦国時代末期にちかいた正の中ごろまで、五〇〇年以上にわたつて安曇地方を支配し続けた、豪族仁科氏とその支族や被官たちが住み、あるいは守備した城砦である。この小文はそれらのうちのの一部と、武士たちの姿をほんの少し瞥見したものである。

## 仁科氏の所領と家臣団

仁科氏の支配していた地域は、時代によつてその周縁部においてかなりの伸縮があるが、およそ現在の大町市と北安曇郡を中心に、時に北方は新潟県糸魚川市周辺、南方は南安曇郡堀金村、豊科町あたり、東方は上水内郡の西山部あたりまで広がっていたことがあつた。そのうちおよそ現在の大町市域に当たる部分が仁科氏の直轄領、他地域は親類被官らを分封して、半独立の委任統治のような形態をとつていた。大町市域は仁科庄および仁科御厨の領域に当たり、佐野坂以北は六条院領の千国庄、松川村以南はやはり皇族領の矢原庄や住吉庄ということになる。しかし皇族の私領という名義になつてはいるものの、支配の実権は在地の土豪が握っている。

仁科氏の末期に近い頃ではあるが、主な家

臣たちの名を列ねたものに、生嶋足嶋神社所蔵の起請文がある。仁科盛政と十人の親類被官たちが、武田信玄に対する忠誠を神前に誓つて、熊野牛王饗紙に記したものである。その名は堀金平太夫盛広、古厩平三盛隆、浪田見源介政長、沢渡兵部助盛則、日岐盛次、穂高左京亮盛棟、等々力豊前守定厚、野口尾張守政親、関近助政直、小宮大蔵丞政知。このうち先の六名が、いつの時代にか仁科氏から分れた支族で、あとの四名が仁科氏とは血のつながりはない随身の被官たちである。かれらはおそらくまだ他にも数多くいた親類被官たちの、代表的な地位にあり、仁科氏を動かす実力者たちであつたろう。そして親類の六名は、その姓の示すそれぞれの領地に居館と城を持つのに対し、四名は直接仁科盛政の側近にあつて、領国経営の実務に携わつている官僚たちではなかつたかと考へる。親類の者たちはそれぞれの領地に於て、家の子、郎等を養ひ、かれらとともに田畑を耕しながら、武技も練る日々を送つていたのであろう。大町の仁科氏惣領家から出陣の布令があれば、かれらはそれぞれ在所から、複数の騎乗の武士とそれに随従する歩卒たち、旗持ち、食糧等を運ぶ人夫や乗替の馬も曳いて大町に集合する。中には騎乗者は自分一人で、あとは歩兵だという小さな分限の者もいたかも知れない。そういう小集団が集まつて仁科軍団となるのだが、後世のように、あるいは他の先進地域の大名のように、村落を離れて専門の戦闘集団となつた武士たちを多く抱えるのに比べると、武士ひとりひとりの戦闘力は別として、仁科氏の軍団は全体的な結束や行動に、弱点を持つていたのではなからうか。

仁科氏およびその親類被官たちの居館や、山城の基本的な形は、郭(曲輪)と称する一區画と、それを囲む堀、郭の外周に築かれた土居とよばれる土手である。あまり地形に制約されない平地の居館のばあいは、その平面形はほとんど回字形をとる。堀は水のない空堀もあり、水を湛えた堀もある。このあたりは平地といつても多少の傾斜があるから、水堀のばあい同一水面にすることは難しかったと思われる。郭の内部にある建物は、おそらく後世の大きく頑丈な農家程度の母屋と、付属する幾棟かの建物を想像すればよいだろう。屋根は萱葺きかあるいは大板葺きであつたろう。

山城は居館からあまり遠くない独立丘や、山背に構築されることが多く、その山頂や尾根のピークに設けられる郭は、おのずから円あるいは楕円形となり、空堀はその前後の尾根を掘り割つて作られる。郭のまわりには一段低く、帯郭とよばれる狭長なテラスをめぐらせていることも多い。物見程度の小規模な山城でも、当時はそこに小屋があり、交替の人が詰めて遠見を怠らなかつたものだろう。防禦的な機能を持つ規模の大きな山城は、合戦になると麓の居館を捨て、時には焼いてそこに立てこもるのだが、そのばあいは老人や女子供などの非戦闘員はどうしたのだろうか。もちろん武士たちと行動をとる場合もあつたと思うが、私は、標高もやや高く、里から離れた所にあつて、戦略的にもあまり意味もなさそうな小規模な山城を、そうした人たちの避難用の隠れ城ではなかつたかと考へている。清水のシンジヨカラの上の城や、松川村川西の布上城などが、あるいはそれに当たるのではなからうか。

天正寺居館跡

いま大町市十日町にある天正寺の地は、仁科氏時代後期の居館のあとで、仁科庄の政所でもあり、領国支配の要であった所である。仁科氏は初め社地区の館の内に居館を構えていたが、おそらく鎌倉時代中期頃、仁科庄の中心にあたるこの地に移ったものと考えられている。

居館の規模は東西一七〇m、南北一〇八mの長方形で、周囲に幅一〇mほどの外堀をめぐらし、その内側に土居がある。堀の断面は内側の深い片葉硯状を呈する。現在北側に堀あとをよく残し、近年またその部分に水が湛えられるようになった。他の側でも外堀の跡は一連の凹地としてうかがえる。内部は中央より少し東寄り、主郭と二の郭に分れ、主郭のうちの北寄りの、現在天正寺の伽藍の建てられている部分に、狭い内堀をめぐらせた中に居館があった。内堀の水は西方から流れてくる表御所川を、外堀に掛け渡した樋によって導き入れたのではないかと考えられる。内堀のあととは西方と北方に、今も川となって流れるのを見ることが出来る。

二の郭は東部の一段低い地域で、ここは家臣らの家や、蔵などのあった区画であろうか。郭の東辺の外堀に臨むあたりには、土居の一部も残存している。

居館の大手門は、おそらくいま寺の総門のある位置と考えられるであろう。外堀に架せられた橋を渡り、門をくぐってしばらく歩むと内堀があり、その橋を渡ればさらに門があり、そして居館の玄関に至るということであろうか。母屋である建物は壮大な大板葺きではなかったかと思う。また近年寺の大修理の際、西方の薬師堂の地下から、古い形の包丁

の出土を見た。あるいは厨房のあった所かも知れない。

南城および北城跡

社地区木舟集落の東方、鳥屋沢をはさむ二つの屋根に構えられた大規模な山城で、麓の館の内に仁科氏の居館のあった頃には、ここがその本処の城であり、天正寺の地へ移ってから後も、この城は重要な砦として最後まで使用されていたようだ。郭は両尾根の集まる標高九二六・七mの地点に設けた、一辺約二九mの方形の主郭と、その前後の深い空堀群を中心にして二つの尾根にわたり、おびただしい数の大小の郭を馬蹄形に連ねているが、南に手厚く北に薄いの、おそらく南方を意



北城(左の尾根)と南城(右の尾根)

識してのことであろう。そして主郭の東方に延びる平坦な尾根先には、搦手を守る位置に青木城といわれる小さな砦を設けてある。主郭の北西方少し下った両尾根の中間地帯は、城の平とよばれる緩傾斜地で、城に詰める武士たちの居住区であったと思われる。鳥屋沢の源流である尽きせぬ湧水もあり、陶器類や茶臼などが出土したこともある。南北両城はあわせて一城と見るべきであろうが、もともと分けて呼んでいたらしいことは、天文二二年(一五五三)の仁科盛政文書(栗林士郎氏藏)に、「きたこやの者にも可申渡候」とあることから察せられる。小屋というのは城砦の古語である。

山城はその城一つだけでは弱く、強力な防禦力は、周辺に配置した城砦群が有機的な連携作戦を行なってこそ、發揮されるものである。大きく見れば仁科氏領国内に、網の目のように張りめぐらされた城砦群がそうであろうが、その中のそれぞれの地域におけるやや規模の大きい山城は、またそれを守る砦をいくつか持っている。たとえば南城北城のばあいは、すぐ南に丹生子城、その南方に城の峯城があり、沢渡氏の三日市場城のばあいは、西方に月夜柵、飯田、北方に堀の内城を配するというあんばいである。

居館跡や山城の現状についてふれておきたい。山城はもともと山中に位置することもあまり損われていないが、近年人びとの山林への関心が薄まったこともあって、木がよく茂り藪もはびこってまた原始に還るかのようである。遺構の保護の上からすれば結構なことだが、研究者見学者には少くも迷惑な点もある。平地にある居館跡の多くは、まず水田化によってその姿がかなり失われた所へ、



北城および南城の郭の配置

宅地化の波がおしよせており、全く影も見えなくなってしまうものも少なくはない。標柱や案内板のあるのはいい方である。今からではやや手おくれの感がないでもないが、地域の人びとの関心を深め、行政側と協力する形で保護対策を講じたいものである。その好ましい例を大町市常盤の、西山城址保存会の仕事に見るように思う。

日本考古学協会員  
(大町市・松川村・白馬村文化財審議会委員)

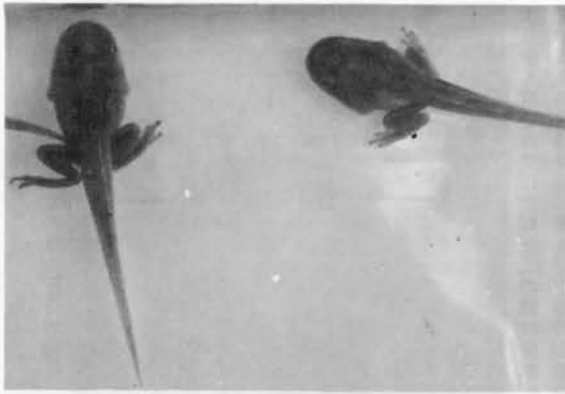
# 安曇野のオレンジガエル

宮田 渡

## 一、オレンジガエル発見の経緯

昭和六一年六月二十九日に南安曇郡穂高町有明の主婦、平林正江さんが、自分の水田でオレンジ色をしたオタマジャクシが泳いでいるのを発見。このなかから五匹を捕獲し、二匹は自宅の庭の池に放し、四匹は大町高校生物研究室に届けられた。

四匹は金魚用の餌で飼育されたが、七月四日に二匹が死亡。二匹は七月五日に変態を終えて小さなカエルとなり、以後ショウジョウバエとアブラムシが餌として与えられた。体色は日本色彩研究所の「色名小事典」と



1.有明産オレンジカエル(7月4日)

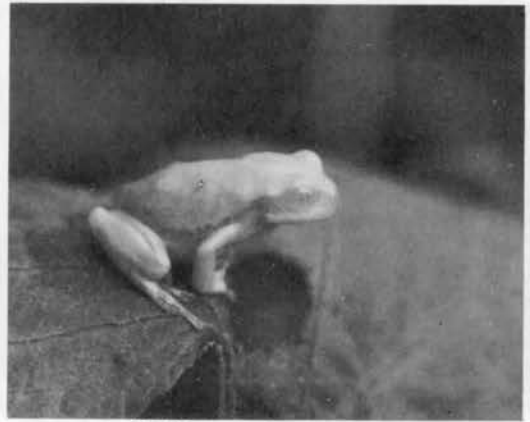
照らし合わせると、「オレンジ・ビール」という色に近いことが分かった。そして、カエルの種類はアマガエル科のニホンアマガエルの変異個体である。

七月九日に伊那市の主婦の唐沢さんという方から電話があり、金色カエルを飼っているが餌には何かよいかとの問い合わせであった。信濃毎日新聞の報道によると、このアマガエルは伊那市郊外の天竜川支流沿いの水田で有賀七蔵さんが発見したものである。色は黄色味の強い個体のものである。

さて、安曇野では、大町市市区でも有明の個体に近いオレンジカエルが七月二十八日に横沢力門さんによって二匹捕獲された。一か所に三匹いたが、一匹は草刈機に触れて死亡したという。同地区の横沢宏昭君も二匹捕獲したが逃げてしまったことである。地区のオレンジガエルは有明の個体よりやや淡色であったが、惜しくも十一月上旬に死亡した。有明産のオレンジガエル二匹は、飼育設備の整っている北里大学生化学研究室に研究用として提供された。

## 二、オレンジガエルのなぞ

正常なニホンアマガエルは、日本では最小のカエルで、指さきには大きい吸盤をもち、他物に吸着して生活する。普通背面は緑色、腹面は白色、鼻の穴から耳に至る黒いすじがあり、眼は黒い。しかし、オレンジガエルは腹部以外がオレンジ色で、鼻の穴から耳に至



るすじは淡赤色を呈し、眼も赤い。正常個体のような体色変化も見られない。

どうしてこのようなカエルが生じたのであろうか。カエルの表皮には黒いメラニン色素をもつ黒色素細胞、黄色の色素をもつ黄色色素細胞、そして赤い色素をもつ赤色素細胞とがある。特にメラニン色素細胞は伸縮自在で、著しく伸長した場合は他の色素細胞をとりまいてしまつて体色を暗化させる。これらのすべての色素形成に異常が起きるとアルビノ(白子)となり、メラニン合成酵素であるチロシナーゼのみで異常が起これ、他の色素形成に異常がないときオレンジガエルになるものと思われる。

大胆な推論をすれば、この異常は本年突然出現したものではなく、劣性遺伝子として、すでにわずかながら存在し、同型接合体の子に出現したものと解釈も成り立つ。

(大町高校教諭)

2.大町市産オレンジガエル(8月6日)

## 博物館だより

「ライチョウの生活」(復刻版)について

山岳博物館の顧問として博物館の育成と強化に力を注いでこられた信州大学名誉教授羽田健三先生の定年退官にあたり、羽田健三先生退官記念事業会(代表阿部西与)では、このたび昭和39年に初版刊行のまま絶版となっていた本書を500部限定復刻いたしました。

残部が少なくなつてまいりましたが、一冊4千円で頒布しております。ご希望の方は山岳博物館気付の同事業会(☎0261-29211)へ電話でお申し込みください。

## 資料寄贈ありがとうございました

蝶類 18種18点 蛾類 19種23点

トンボ類42種45点 長野市松代町 倉田 稔

あかしいれ 1点 大町市神楽町 白沢良一

二本ソリ他 4点 大町市平青木 西沢幸雄

鳥捕獲許可証1点 大町市白塩町 黒田明夫

登山用具 52点 大町市高見町 伊藤方勇

全日本登山とスキー用品専門店協会

登山靴 2点 東京文京区向ヶ丘 豊田重彦

シャツ他2点 大町市大黒町 千葉保人

アイゼン他1点 大町市平借馬 竹森善造

ニッカズボン他1点 東京立川市 中村涼三

## 山と博物館第31巻第12号

発行所 長野県大町市 TEL22-2211

印刷所 大町市山岳博物館

印刷所 大町市山岳博物館

定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号(長野四一二三九九三)